

## 地理で「民族」を学ぶ

城西国際大学教授 綾部恒雄

### 地理と異民族・異文化理解

ここ20年ほどの高校の地理の教科書の内容を検討してみると、いわゆる人文地理に当たる部分の内容が、経済に関する記述と並んで、政治（国民国家など）や民族（異文化理解など）についての記述がしだいに増えてきていることがわかる。20世紀後半は民族の時代といわれていたことの反映であろうが、異民族理解・異文化理解の必要性が、21世紀に入ってますます高まっているようである。

他方で、1980年代からコンピュータの加速度的発達によって、IT（情報技術）時代が到来し、グローバル化の進展が、私たちの生活の質を根底から変革してきているようにみえる。ITの発展は世界を狭小化し、グローバル化は、世界の経済、政治、文化、価値観を一元化していこうとする力（具体的には世界唯一の超大国アメリカ合衆国の規準に世界が統合されていくこと）と考えてよいだろう。しかし、世界のトップレベルの識者の多くは、世界の数千の文化（民族）が一元化されていくことに、きわめて懐疑的であり、世界の文化が多様な言語・宗教・価値体系をもっていることこそ人類の文化に豊穡さが期待できるのだと考えている。

民族理解あるいは異文化理解というトピックが、地理の教科書の中にも頻繁に採りあげられるようになったのは、世界の人々の生業形態（農業・牧畜・工業・情報産業など）や生産物、衣服、言語、宗教などが民族とよばれる、それぞれ独自の伝統的特色をもった「文化共同体」と不可分の関係にあるからに他ならない。そこで地理の教科の中で「民族」が採りあげられる場合に留意しておくべきことを次に記してみたい。

### 民族・人種・国民

民族を論じる場合によく混乱して用いられる概念に「人種」と「国民」がある。学問的な定義では民族は「文化とアイデンティティ」を共通にする集団、人種

は形質的（身体的）特徴を共通にする人類のカテゴリー、国民は当該国家の国籍を有する人びとをさしている。しかし、これら3つの言葉が区別されることなく誤用されている文章をかなり頻繁に見かける。こうした誤用は、世界の民族、人種、言語についての分類や区分が、学者の間でも必ずしも一致していないこと、とくに近世以降の世界の人の移動（移民、強制移住、奴隷、難民などによる）や戦争や植民地主義によって、国境の変更、領土の人為的線引きが頻繁に行われたために、異民族、異人種間の通婚や共住が急速に拡大したことが大きな原因となっている。また、世界の192か国（2003年現在）の国の成り立ち、建国のいきさつは変化に富んでいるが、それぞれの国の人々は自分の属する国の歴史や状況を中心に他の国の事情を判断しがちであるということも誤解を起こす理由であろう。

たとえば、日本という国は、何世紀頃から日本列島に現れたのかということについての定説はない。中国の史書『魏志倭人伝』に日本の邪馬台国（2～3世紀頃）についての記述があるが、それが北九州にあったのか、大和地方にあったのかということすら明らかになっていない。ところが、世界唯一の超大国といわれるアメリカ合衆国は、1776年7月4日に独立宣言を採択し、イギリスの植民地から独立建国したことがはっきりとしている。日本は島国であり、おそらく4世紀後半から6世紀末頃にかけて大和朝廷が日本を統一国家の形にまとめあげたと考えられるが、以来千数百年の間異民族によって支配されたことがない。中国の歴史も日本以上に古く起原は明瞭でないが、大陸に位置しているため、13～14世紀にはモンゴル民族に支配された（中国の王朝としては元）し、17世紀から18世紀末までは、当時の満州に興った女真族によって支配された（清朝）。現在の中国は56の民族から成っている。

このように、世界の大国といわれる国々も、異民族の支配を受けなかった国は存在しない。日本人が民族問題に不馴れなのは、日本列島の中で、2000年にわた

って異民族による支配・征服を受けてこなかったこととおおいに関係がある。いうまでもなく現在の日本には朝鮮民族（約70万）、漢民族ないし華人（約20万）アイヌ民族（約2万）が永住外国人または日本国籍を持った異民族として居住しているが、1億2600万の日本の人口からすれば、1%に満たず日本国民の99%は日本民族だということになる。そこで日本人の多くは、日本の国名は日本であり、この国を支配しているのが日本民族であり、国語を日本語とよぶことに何の疑念も狭まない。

しかし、第2次世界大戦後パレスチナ地方に建国されたイスラエル（国名）の主要民族はユダヤ民族であり、国語はヘブライ語とよばれていること、アメリカ（国名）をつくった民族は、ヨーロッパから移り住んだ多数の民族（アングロサクソン、ドイツ、フランス、スカンジナビア系諸族など）であり、アメリカ民族というものは存在しないこと、最も普通に用いられている言語が英語（English）であることなど、さまざまな国の事情を日本人は心得ておく必要がある。因みにアメリカ合衆国には法律で定められた国語は存在しない。

主として民族と国民の関係についてのみ述べてきたが、人種について触れてこなかったのは、人種問題は民族問題以上に複雑であり、人種についての説明にはさらに多くの紙数を要するからである。ただ、モンゴロイド（黄色人種）、ネグロイド（黒色人種）、コーカソイド（白色人種）という古典的分類は、現在学術的には用いられていないことを指摘しておきたい。

民族と国民の関係については、先にそれぞれの国の建国のいきさつや異民族間の征服・被征服との関係で事情が異なることを述べた。現在、世界の192か国のほとんどが多民族国家であり、それぞれ国民国家としての統一と、国民を構成する多様な民族集団のエスニシティとの間のバランスを保つことに、腐心している。こうした中で、「多文化主義」という政策を世界に先がけて国として採用し成果をあげているカナダの事情を紹介しておきたい。

### カナダの二言語多文化主義

カナダは1971年に多文化主義を国の政策として掲げ、1988年には「カナダ多文化主義法」を議会で通過させて

いる。多文化主義とは多民族から構成されている国民国家が、単一の有力な民族の言語・文化の下に統合されていく同化主義的政策をとらず、国民国家を構成する多様な各民族集団の伝統文化、言語、生活習慣を積極的に保護し、政治的、社会的、経済的、文化的な不平等をなくして、国家の統合を維持しようとする考え方である。

しかし、カナダが多文化主義法を成立させるまでには、幾つもの難関を越えなければならなかった。カナダ多文化主義の成立を理解するためには、やはり、イギリスの植民地だったカナダが独立するまでの歴史をみつまんで見ておかななくてはならない。カナダに最初のコロニーをつくったのはフランス人であり、1604年にアカディア（現在のノヴァスコシア）に、1608年にはケベックに毛皮交易所が設けられた。イギリスが本格的にカナダに進出するようになったのはハドソン湾会社が設立された1670年であった。18世紀に入るとカナダ東部沿岸部における英仏の覇権争いが激化し、1759年のケベックの陥落によって、イギリス系人の支配が確立される。このあとカナダは多種多様な移民が上陸し定着して、世界有数の移民国家となった。

しかし、18世紀半ばの英仏の争いのしこりは現在なお続いている。とくにカナダ人口の4分の1を占めるケベック州の人口の8割をフランス系が占め、あたかも自治領のような動きを続けていることである。1960年代以降、ケベック・ナショナリズムをかかげるケベック党を中心とするフランス系住民のカナダからの分離・独立運動が活発化し、住民投票を2度も行っている。カナダ政府の「二言語（英・仏語）多文化主義」の採用は、こうしたケベックにおける分離運動を沈静化し、国民国家としてカナダを統一していくことから始まったといってよい。現在のカナダには30~40種ほどの民族集団がカナダ国民として居住しているが、カナダは「世界で一番住みよい国」としての評価を得つつある。こうした評価は、カナダ政府が採用した民主主義的「多文化主義」の成果であることは間違いない。

世界には、4千数百種の民族が存在するが、国家の数は192である。他国を理解するためには、その建国時のいきさつと歴史、当該国の国民がどのような民族集団によって構成されているかを理解しておくことが肝要であろう。